

第2回レフェリーアカデミー報告書（梶原康司）

I. 審判員の心得 10 か条を振り返る（全国研修会に参加して）

① リーダーシップ

講義最後での質疑応答では、発言することができなかった。講義を受けながら、自分が吹笛する場面を意識して、疑問を探すべきであった。

② 誠実さ

講義のなかで、気になったことや知識が曖昧だったことは記録できた。

③ ルールに関する知識

ビデオテストで、明らかな得点チャンスや試合終了 30 秒前に関する部分の理解不足を感じた。競技規則の読み込みが甘かったからであるので、自分の言葉で説明できるように理解を深めていく。

④ 冷静さ

今回、予定された時間より早く終わることができるなど運営面では問題なくこなすことができた。

⑤ 正しい判断

会場の設営など、自ら気づき積極的に行動できた、

⑥ 身体上の適正

体力測定（シャトルランテスト）では、今まで最高の 122 回を記録することができた。朝のトレーニングは、場所が限られたが、メニュー通り取り組んだ。持久系だけでなく、筋力系のトレーニングもメニューに組み込まれていたため、これから意識的に取り組んでいきたい。

⑦ ユーモアのセンス

休憩時間にハンドボール以外の会話等する機会もあり、少しは顔を覚えてもらうことができた。

⑧ 勇気

積極的に発言することができなかった。このような場面での発言では、試合での選手やベンチ役員とのコミュニケーションと同様だと思うので、普段の生活から慣れていきたい

い。

⑨ 協調性

集団の和を乱すこと無く、スムーズに行動できた。また運営面でもアカデミー生全体で協力することができた。

⑩ 仲間意識

映像を見ながらアカデミー生とは意見交換できたが、他の審判員の方々とはなかなかできなかった。疑問に思ったことは近くの方々に積極的に聞いてみるべきだった。

II.今後の大会に向けて本研修を受けて自身の課題を考える

○本研修を受けての自身の課題：パッシブプレー

本研修のパッシブプレーの講義を受けるまで、パッシブプレーの予告合図は時間帯や点差、組み立て局面など深く考えずに、雰囲気ですしていた。特に、パッシブプレーの予告合図をしようとした段階でフリースローを判定した場合、フリースロー後の1回目のパスで、パッシブプレーの予告合図をすることは、今までかなりしていたので、間違いだったと気付かされた。攻撃側チームは、短い組み立て局面を使って攻撃活動の準備をする権利があるので、レフェリーは攻撃側チームの動向を観察する必要がある。

また試合終盤の重要な時間帯での観察はとても重要である。最初のセットオフエンスにおける組み立て局面において、極端な遅延は許されていないので、レフェリーはプレーヤーが歩いて空いたコートに移動していないか、立ったままパスしていないか、戦術的意図な意図がないクロスプレーをしていないか、観察する必要がある。勝っているチームが有利にならないよう、逆に負けているチームが損しないように注意しなければならない。

レフェリーは予告合図なしに、直接パッシブプレーを判定することもできる。攻撃側プレーヤーが明らかな得点チャンスを使わなかった場合、パッシブプレーを判定しなければならない。特に、試合終盤で起こりえる可能性があるため、時間帯を把握しておかなければならない。

パッシブプレーにおける上記3点を踏まえて、次回の担当試合（日本選手権福岡県予選）に向けて日々研鑽を積んでいきたい。